

令和8年度港区指定文化財の指定に係る諮問について

協議内容

港区文化財保護条例第39条第1項の規定に基づき、港区指定文化財の指定について、港区文化財保護審議会に諮問します。

1 指定文化財候補

(1) 種 別 有形文化財 建造物
名 称 麻布中学校・麻布高等学校教室棟 (1棟)
所 有 者 学校法人 麻布学園
所在の場所 港区元麻布二丁目3番29号

(2) 種 別 史跡
名 称 大久保彦左衛門家墓所 (48.9 m²)
所 有 者 宗教法人 立行寺
所在の場所 港区白金二丁目526番地

(3) 種 別 名勝
名 称 大橋茶寮庭園 (413.45 m²)
所 有 者 個人
所在の場所 港区虎ノ門五丁目18番地10

2 今後のスケジュール(予定)

令和8年 8月上旬	文化財保護審議会諮問
9月下旬	答申
10月上旬	教育委員会審議 港区指定文化財の指定の告示
10月下旬	区民文教常任委員会報告

有形文化財 建造物

麻布中学校・麻布高等学校教室棟（1棟）

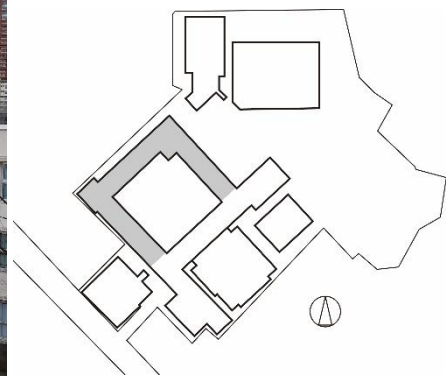
本校は、明治 28（1895）年、東洋英和学校内に東洋英和学校内尋常中学部として創立。同年、私立麻布尋常中学校と改称。さらに、明治 32 年、麻布中学校と改称し、翌年、現在地に移転します。戦後の教育改革で、昭和 22（1947）年に新制中学となり、翌年新制高等学校に改組され、麻布中学校・麻布高等学校となります。

本建造物は、同校卒業生の古橋柳太郎^{ふるはしりゅうたろう}により昭和 5 年に設計され、清水組が施工した、一部地下 1 階、地上 3 階、鉄筋コンクリート造です。工事は二期に分けられ、昭和 7 年に、中庭を囲んだコの字型平面のうち、北東と北西部の 2 辺が L 字型で竣工。昭和 12 年に南西部の教室が完成します。南西部教室棟の端部は昭和 46 年に解体・建て替えられましたが、コの字型の教室棟はほとんどが残され、今なお活用されています。

外観の特徴は、北側の角、時計台部分に集中しており、中庭に大きく張り出した庇、階段踊り場に対応するようにあけられた連続した縦長窓や、時計台を支える八角状の張り出しなどに意匠面の工夫を見ることができます。時計台の内部は階段室となっており、1 階から屋上階までを 2 本の円柱が貫き、その間を抜けるように階段がめぐらされ内部空間の特徴の一つとなっています。

本建造物は、建設当初、普通教室の他に、教員室や図書室等が設けられていましたが、現在はすべての部屋を普通教室に改修し活用しています。教室の一部改造や、南東部の増築があるものの、外観を中心に、階段室内、廊下は建設当初の姿がよく残されており、昭和戦前期の学校建築を今に残す貴重な建造物です。

港区内に残されている戦前期の中学校・高等学校校舎はわずかであり、設計者古橋柳太郎の数少ない残存作品の一つとして貴重な建造物です。



配置図・指定範囲

史跡

大久保彦左衛門家墓所（48.9 m²）

大久保彦左衛門^{ただたか}忠教は『三河物語』を著し、「天下の御意見番」としてよく知

られた人物です。永禄3（1560）年に大久保忠員^{ただかず}の八男として生まれ、江戸幕府の槍奉行や旗奉行を歴任した2000石の旗本でした。気骨ある態度を貫いたとされ、さまざまな逸話があります。忠教を初代として、大久保家歴代当主は彦左衛門と名乗り、江戸時代を通じて8代の当主を数えました。

この大久保彦左衛門家の菩提寺である智光山立行寺（法華宗陣門流）は、寛永7（1630）年に日通聖人によって、麻布市兵衛町に開山されました。同16年2月に忠教が死去すると、その墓が設けられています。この後、寛文8（1668）年の火災で焼失すると現在地へ移転しました。

現在、立行寺には、大久保彦左衛門家の初代から8代までの歴代当主、及びその家族たちの墓が、本堂の南側に建つ鞘堂に覆われた範囲とその周辺に17基あります。鞘堂には、「大久保講」と記された大正11（1922）年10月吉日付の奉名板が掲げられており、「志田町」や「魚らん下」、「三光」など、立行寺周辺の当時の地名も奉納者の住所として確認できます。これは、忠教を信奉する「大久保講」が、忠教らの墓を拠り所とし、立行寺の周辺地域に根差した形で存在していたことを示す興味深いものです。

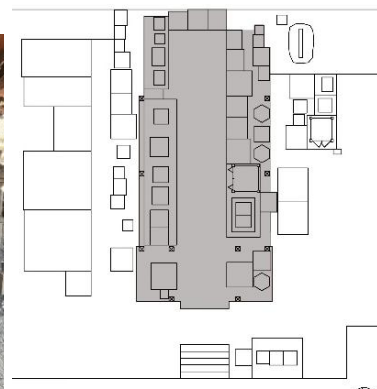
忠教の墓は、海雲山長福寺（愛知県岡崎市）と光了山本禅寺（京都府京都市）にもありますが、立行寺には、大久保彦左衛門家の墓がまとまっており、俗に大久保寺とも呼ばれています。忠教のみならず、一つの旗本家としての墓群が残されている点で貴重な史跡です。



立行寺大久保家墓所



大久保忠教墓



指定範囲

名勝

大橋茶寮庭園 (413.45 m²)

大橋茶寮は、虎ノ門に位置する茶寮です。創設者大橋宗輝は、名古屋市栄町に「八州茶寮」を構えていましたが、戦災によって罹災し、戦後、現在地に移転し「大橋茶寮」と称するようになりました。南北 12 間（約 21.6m）、東西 11 間（約 19.8m）ほどの正方形敷地に 5 席の茶室が口の字型で密に配置されているもので、昭和 22（1947）年から 2 年ほどかけて造営されました。昭和 24 年には裏千家家元の淡々斎を招いた席開きが執り行われ、昭和 36 年まで淡々斎の東京道場としても利用されました。

茶室の建築は数寄屋大工・木村清兵衛^{きむらせいべい}が担当し、庭園は飯田文次郎^{いいたぶんじろう}が造園しました。敷地には、5 席の茶室が口の字型に配置され、その中央が庭園となっています。正面玄関は敷地西側に設けられていますが、敷地南側にも門があり、ここからは直接庭園へ進むことができます。敷地中央に小川が流れ、水面が多いことがこの庭園の特徴といえます。

庭石には筑波石と呼ばれる花崗閃緑岩が多用され、庭内を移動するための飛石や池の護岸に用いられています。庭の中央部に位置する池は庭の多くの部分を占め、庭園を大きく特徴づけるものです。

大橋茶寮は、周辺が再開発で大きく姿を変える中で、戦後間もなくから当初の姿を維持している希少な庭園であることから、港区内の近代日本庭園として貴重な名勝です。

